

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第7号 花き

発行日 平成23年 9月29日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ りんどうの病害虫防除の徹底と、翌年に向けた収穫後管理を行いましょ
- ◆ 小ぎくの健全な親株を確保しましょ

りんどう

1 生育概況

今年の彼岸需要期は各地域とも概ね順調に出荷されました。病害虫ではリンドウホソハマキが昨年ほどではありませんが継続して発生しています。その他に、地域によりハダニ類、オオタバコガ、黒斑病の被害が見られます。

2 病害虫防除

- (1) 葉枯病：秋期にも降雨により拡大する可能性があるため、株養成ほ場の防除を継続します。
- (2) 褐斑病：発生はそれほど多くありませんが、有効な薬剤を散布するほか、被害茎葉を圃場外に持ち出して処分します。
- (3) 花腐菌核病：高温の影響により子実体(きのこ)の形成がやや遅れぎみでしたが、9月半ばに西和賀町でIV型の発生が確認されています。花腐菌核病は花卉から感染するので、蕾から花卉が見えている品種の花蕾部への防除が必要です。各地域の暦にしたがって防除を進めてください。降雨が続く場合は散布間隔を短くし、防除は10月末まで継続します。発病が見られた場合は、菌核ができる前に被害茎を圃場外に持ち出して処分します。
- (4) リンドウホソハマキ：盛夏過ぎから茎への侵入による被害の発生が多く見られています。また、定植一年目のほ場でも被害が見られています。発生の状況を確認するとともに、発生の見られるほ場では、残茎葉の折り取りを確実にし、ほ場外で確実に処分します。
- (5) アブラムシ類・アザミウマ類：開花中～開花後に特に増加します。アザミウマ類やハダニ類の発生が多い地域がありますので注意が必要です。これらの害虫は、ウイルス病を媒介するおそれがあることから、収穫後の残花部分は確実に折り取り発生を抑えます。極晩生種でも発生が広がるため薬剤散布に努めます。



定植年のリンドウホソハマキ被害

3 収穫後の管理

- (1) 収穫後の圃場は病害虫防除がおろそかになりがちで、病害虫が多発しやすくなります。翌年の発生原因ともなるので、収穫後も防除を継続してください。
- (2) 収穫後は花の着いた茎の部分の折り取り病害虫防除と株養成を促します。定植年の株でも開花しますので、花はできるだけ摘み取ってください。
- (3) 茎葉の折り取り・刈払い：ウイルス病などの感染を防ぐため茎葉が完全に枯れてから刈り払います。晩生種や極晩生種は枯れる時期が遅くなりますが、無理な折り取りで株を傷めることがあるので、その場合は春に折り取るようにします。
- (4) 雑草防除：翌春の雑草対策のため、秋のうちから圃場内外の雑草対策を行うことが効果的です。

小ぎく

1 生育概況

9月咲品種の開花は地域により進み具合が異なりましたが、概ね彼岸需要期には出荷ピークを迎えました。病虫害では、オオタバコガによる被害が問題となっていますが、防除ごよみ等で対策を講じられた成果が見られ、昨年に比べると被害は抑えられています。しかしながら、フェロモントラップでの調査では現在増加傾向にありますので今後も要注意です。

2 病虫害防除

秋の涼温となると白さび病の感染が多くなります。特に、親株に伝搬しないように注意して下さい。また、オオタバコガを含め、他の害虫も残っているので、病虫害防除を継続します。

3 親株管理

(1) **栽培計画**：翌年の栽培に向け、各品種の開花期や特性を整理します。特に物日需要期の出荷遅れの反省をふまえて品種構成や作付面積を決定し、必要な親株の数量を確保します。

(2) **親株管理**：次年度用に選抜した親株には、収穫後、順次土寄せ、追肥を行って株養成します。茎が伸びてきたら適宜台刈りを行い、伸びすぎないように管理します。

親株のハウスへの伏せ込みは10月下旬～11月上旬頃までに行い、早めに活着させるよう管理します。伏せ込みは、品種や株の充実状態等により適する方法が異なり、また病虫害の持込程度も異なるので、適した方法で作業を進めてください。

- ・ 親株の伏せ込み

冬至芽の発生の少ない品種に適し、作業の手間も少なく済みますが、白さび病などの病害を持ち込む事が非常に多くなるので、薬剤散布に注意が必要となります。

- ・ かき芽利用

冬至芽の発生の遅い品種、少ない品種に有効ですが、病害を持ち込みやすく、株での伏せこみより手間がかかります。

- ・ 冬至芽利用

揃いが良くなり病気の持込が少なくなりますが、伏せこみ作業に労力がかかり、冬至芽の発生が少ない品種には利用できません。品種の特性を十分に理解して、それぞれに適した増殖方法を選択してください。

ストック

1 定植後の管理

(1) **かん水**：蕾が見える頃までは十分にかん水し、草丈を確保します。発蕾後のかん水量が多いと花穂部の徒長や茎の軟弱化を招くので、かん水を徐々に控えます。

(2) **温度管理**：できるだけ涼しい温度で管理することを心がけます。霜が降りる頃まではハウスを開放しておきます。強風等によりハウスを閉める場合は循環扇等を利用して空気を対流させ、徒長や菌核病の発生を防ぐよう努めてください。

(3) **追肥**：生育に応じて速効性の肥料を施しますが、草姿の悪化を防ぐため発蕾までに終えます。

2 コナガ防除

(1) 生育中の薬剤防除は、抵抗性獲得を避けるため異なる系統の剤のローテーションでの使用を徹底します。

(2) またハウスの開口部を防虫ネット（目合いが1mm以下のもの）でふさぐことも効果的です。この場合通気性が悪くなり品質低下の原因となる場合があるので、風通しの悪い場所では注意が必要です。

農作物技術情報第8号は10月27日（木）発行の予定です。
気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。
※ 発行時点での最新情報に基づき作成しております。
※ 発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

9月15日～11月15日は秋の農作業安全月間

農作業 無事故でつなぐ 明るい未来